

特集にあたって (特集 アジア地域研究と雑誌 -- 「コア・ジャーナル」を語る)

著者	石井 美千子
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	198
ページ	2-3
発行年	2012-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00045955

特集にあたって

石井美千子

本特集を企画した当初、研究者から次のような声が聞かれた。「コア・ジャーナルというのは何を意味するのか。定義はあるのか」

「ジャーナル」というと査読付きの学術誌というイメージだが、研究上欠かせない文献は学術誌（ジャーナル）ではなく情報を取するための雑誌（マガジン）である」「研究資料として雑誌を使うという手法はとっていない」。たしかに自然科学の世界と比較すると、地域研究においては、学術誌で最新の論文をチェックする必要性は相対的に低い。また、地域研究に従事する研究者の専門分野は様々であり、研究テーマはさらに細分化される。地域研究と結び付けてコア・ジャーナルを論じることには戸惑いを覚えるのも当然であろう。

しかし、研究テーマに直接結びつかなくても、現地の情勢や論調

を知るうえで目が離せない雑誌あるいは月号見るわけではないが多くの研究者が重要性を認めている雑誌などがあるのではないかと。そこで本特集では学術誌だけでなく総合誌や報道誌も含め、さらにはオンライン版なども対象に入れ、各国の雑誌について幅広い観点から自由に執筆してもらうこととした。その結果、実に多様な内容の原稿が集まった。本稿では、それらを内容別に分けて概観する。

●学術誌の評価とコア・ジャーナル

コア・ジャーナルとは「ある専門分野において、重要性が高いとみなされている一群の雑誌」であるが、元来コア・ジャーナルの選定は、図書館が利用者のニーズを的確に把握して雑誌を収集・整備するために行われて来た。コア・

ジャーナルの選定には、質問票などで専門家に評価してもらう、書誌などで論文数を調査して掲載誌を順位付けする、引用文献を調べて引用される頻度が高いものを選ぶ、図書館における貸出や複写の件数から判定する、といった手法がある。なかでも、引用頻度を用いて算出されるインパクトファクター（引用影響度）は、近年、地域研究者の間でも注目度が高まっている。巻頭エッセイで田中耕司教授が述べておられる「リーディング・ジャーナル」とは、インパクトファクターによって高位にランクされるような雑誌を意味するものと思われる。その抛り所となつているのは、雑誌論文の引用・被引用情報を指標化して掲載する Journal Citation Reports (JCR) および世界の論文誌の引用文献を索引化したデータベース Web of

Scienceにおいて付与されているインパクトファクターであろう。それらを作成・提供しているトムソン・ロイター社の棚橋佳子稿は、インパクトファクターによって地域研究関連雑誌を分析したものである。「インパクトファクター値だけで学術誌を評価するべきではなく、雑誌の評価にはピア・レビューも欠かせない」との指摘は頭にとどめておきたい。

JCR および Web of Science に収録する雑誌は、刊行頻度が一定している、国際的な編集基準に準拠している、英文によるタイトル・抄録・キーワードが付与されている、といった厳格な基準によって選定される。Web of Science の採録リストは Web 上で見ることができ、ほとんどの誌名は英語であるため、誌名リストを見ただけでは発行国はわからない。しかし、アジア各国の雑誌はごく僅少であると推測される。トムソン・ロイターでは収録誌の刊行国の拡大に努めているそうだが、言語や国際的編集基準が大きな壁になつていると思われる。

そんななかで注目されるのが中国の躍進ぶりである。木村公一朗稿では世界における中国の存在感

が増すなかで、中国発の学術誌が国際的な評価の場に登場していることを指摘している。いっぽう、台湾で独自に学術誌の等級を定める調査が実施されているのも注目される。佐藤幸人稿はその調査の背景を述べるとともに、等級制度に照らして台湾のコア・ジャーナル六誌を挙げている。

図書館員としてコア・ジャーナル選定の意義を考察しているのが矢野正隆稿である。東南アジア資料に関わる図書館員の共同研究でコア・ジャーナルを選定した経緯を紹介し、図書館が雑誌を収集・整備するうえで課題も論じている。

次の二稿では筆者が客観的な基準を設定して選定した主要誌を紹介している。東川繁稿は、マレーシアとシンガポールの主として社会・人文科学系雑誌からコア・ジャーナルを選定し、各誌の内容及特徴を解説する。高橋宗生稿は、インドネシア語の社会科学関連の主要誌を学術誌、ニュース報道誌、ビジネス誌に分けて紹介する。それぞれ刊行頻度や創刊年等の基本情報を付した主要誌リストを掲載しているが、その他各国についても同様の主要誌リスト作成を図書館の課題としたいところである。

●各国の主要誌を語る

次は、各国の主要誌について自由に執筆されたものを見てみよう。山根聡稿は、パキスタンの雑誌の歴史を振り返り、カテゴリー別に主な雑誌の特徴を紹介しており、パキスタンの雑誌事情を包括的に概観できる。なかでも紀要等の学術雑誌について詳しい。寺本実稿では、ベトナムの学術誌の主要な発行機関を紹介し、人文社会科学研究の中心的存在であるベトナム社会科学院発行の雑誌リストを掲載している。ベトナムでは都市と農村で雑誌の普及状況に大きな格差がある一方、学術誌の種類はかなり多く、それらはむしろ外国人研究者にとって貴重な資料となっているとの指摘は興味深い。小林磨理恵稿は、タイの主要な学術誌や知識層に支持される雑誌を紹介し、タイの学術誌の充実は傑出した個人の力によるところが大きいことや、雑誌が政治変動に影響力を持つてきたことを描きだしている。

特定の雑誌にしばってその内容を詳述しているのが次にあげる各稿である。任哲稿は、中国で御用メディアにはない報道や言論により知識層に支持されている『南方

週末』と『財経』の二誌を推薦している。日本の読者が購読するうえで便利なツールとして中国語雑誌閲覧専用のポータルサイトも紹介している。佐藤宏稿がとりあげるのは“Economic & Political Weekly”一誌である。同誌は学術誌ではないが、インドにおける社会科学発展に大きく貢献してきたという。初代および二代目の編集長は若き知識人の育成に情熱を注ぎ、同誌執筆陣からはアマルティア・センなどの著名な研究者が輩出されている。インドの知の梁山泊ともいえようか。日下部達哉稿は、バングラデシュの教育を研究テーマとする筆者が資料を渉猟してきた末に、自分にとってのコア・ジャーナルを見つけたという幸福な体験を語っている。その雑誌『Teacher's World』は、バングラデシュ自身が教育について論じている専門誌で、筆者が探し求めていた内容がそこにあったという。

●データベースとオンライン情報

現在では学術誌の論文にアクセスする手段として学術データベースが研究者の大きな味方になっている。渡辺雄一稿は、韓国にお

る代表的な学術論文データベースを三種類あげて、それぞれの概要を紹介するもの。

オンライン情報も現代の地域研究における重要なツールである。荒井悦代稿が紹介するスリランカのオピニオンサイトは充実した執筆陣を抱え、コメント機能も備わっており盛んな議論が繰り広げられている。現地のホットな言論に接することができるコアな情報源といえよう。

以上、本特集に寄せられた論者の全体を通して見ると地域研究における雑誌の活用や、情報収集の手段について示唆に富んだ内容になったように思われる。参考になれば幸いである。

(いしい みちこ／アジア経済研究所 図書館資料企画課)

《参考文献》

①日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編 [二〇〇二] 『図書館情報学用語辞典』第二版。

②Source publication list for Web of Science: social sciences citation index 2010 (http://ip-science.thomsonReuters.com/mj/publist_ssci.pdf).